

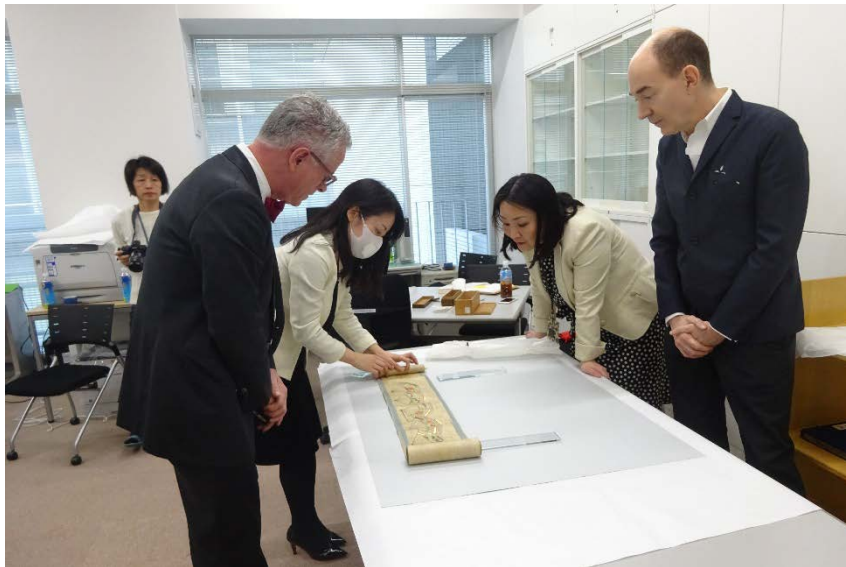
平成 29 年 12 月 20 日 (水)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミランさん WS 「扇の草紙」との出会い

1,3 回目のご来館

マクミランさん 3 回目のご来館では、前回ご関心を抱いておられた、韻文と絵画と一緒に鑑賞する形式の作品をいくつかご覧いただきました。

中でも特に「扇の草紙」という作品に強く惹かれておられ、4 回



¹ 請求記号 99-73

以降はこの作品を中心に上げてゆこうということになりました。

2, 扇の草紙

「扇の草紙」とは、扇の枠の中に絵が描かれ、その周囲に和歌に関連する和歌が配された形態の作品群です。恋田知子先生(当館助教)のお話によると、冊子本、卷子本、屏風など様々な形態の「扇の草紙」があり、しかもそれぞれ少しずつ絵や和歌が違っているため、本当に多くの種類があるそうです。

当館には、卷子本形態の『阿不幾集』¹と、絵と和歌が配された料紙が貼付されている屏風²があり、この2点を見比べるだけでも多くの違いがあります。

どちらも金や銀がふんだんに使われ彩色が鮮やかに残っているだけでなく、流麗な文字が美しい作品ですが、特に『阿不幾集』は小さな姿が可愛らしく、新しい部分が開かれるたびに歓声が上がりました。マクミランさんは、扇が流れるようなリズムで配置されていることに注目されていました。細長い空間を使って連続的な絵を描くことができるのは、卷子本ならではの魅力ですね。

また、絵と和歌の関連性にはすぐに分かるものだけでなく、ヒントを手掛りに読み解く謎解きのようなものがあるそうです。たとえ

² 請求記号 99-151

平成 29 年 12 月 20 日（水）

ば屏風の中のある和歌は武蔵野を詠んだものですが、それを示すために、ムサシアブミを描いた扇の絵が添えられています（図 1）³。歌との関係はないのですが、和歌を読む手助けとして絵が機能している一例です。このような解説を聞かれたマクミランさんは大変面白がっておられました。



図 1



3, 今後の展望

その後の話し合いで、「扇の草紙」はひとつひとつが違い、紹介することの意義が大きいのではないかというマクミランさんのお考えをうかがい、来年度以降は『阿不幾集』の翻訳と解説に取り組むこととなりました。

紹介の方法についても、アイディアマンのマクミランさんから様々な提案がなされ、これからの展開に期待が高まりました。

³ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200015700/viewer/1>